

ボイドの矛盾は、もちろん、私を好きだということです。カレがあなたを好きであるということは、ちっとも矛盾していませんし、カレはあなたが好きです（あなたが“非凡な女の子”であると言ってたし、あなたのことが好きだし、あなたと話すのが好きだと、カレが言ってましたから）。ところで、カレが私達のことを話す時、〈ミス〉をつけず名前だけで、“エリザベス”とか“アン”だとか呼びます。

世間の噂については、私の落ち度によるところが大いにあるので、とても申しわけなく思っていますが、カレはそれについてはとてもやさしく、その一部始終を話したり、笑ったりします。ワシントンで何人か女の子を飛行機に乗せるようにして、噂をたくさんたてようかと、言っているのです。（内緒よ）

1928年11月30日

メキシコシティのアメリカ合衆国大使館にて

最愛のエリザベスへ

私達は、感謝祭にはあなたのことをとても思っていました。（ねえ、去年の感謝祭では、私達はアムハーストにいて、おっそろしく雨が降って、いろいろな教会に行ってみて、夜には、私のお部屋で夕食を食べて、それからドゥワイトを秘密で上まで連れこんだのでした！）

私達は、こじんまりした連合教会の式にあづかりました。メインストリート・ボンネット聖歌隊がひどく下手な歌を歌ったりしました。

それから、パパがスピーチをしました。とても素晴らしかった。パパは感謝祭の意味を明確に話しました。“個人、家庭で家族が喜びを分かちあい祝う日”から始めて、昔の“感謝の祈り（祭典）”のことを顧みて、人はその“感謝の祈り”によって、どんな人かが判ると、パパは言いました。「ある男は、その感謝の祈り故に、何代にもわたり、その一族の

名前を軽蔑されることになりました。」（パリサイ人の祈り「私がほかの人達のようにではないことを神に感謝します」）。そして、異国の地での私達の感謝の祈りがどうあるべきかということにつなげました。「私達がほかの人達と同じであることを神に感謝致します。」

ただ、それはお説教じみではなかったし、キザでもなく、とても繊細に美しくなされました。パパは口を引き締め、目は真剣に遠くを見つめ、自分が感じていることを力を込めて言うために、前のめりの姿勢で話しました。

その夜、私達はかぼちゃだらけの長いテーブルを使いました。職員のための晩餐です。私はホィットニー⁽¹⁶³⁾（サンディの友達）という、ボイドのことをよく知っている人の隣に座りました。私はとっても素敵な夕べを過ごしたのですが、そうではない振りをして、けなすようなコメントをして、ホィットニーがボイドを賞賛するように仕向けました。たとえば、「皆さんが、おっしゃってるんですけど……」とかね。

アディオス、最愛のお姉様。明日から一週間後にはお家よ！

1928年12月1日〔チャールズ・リンドバーグ宛の手紙〕

親愛なるチャールズへ

小包を忘れたことを憶えていて下さり、その代わりの物のことまでご心配下さって、祖母がとても感激して喜んでおりました。あなたの御配慮と御親切に対して、家族一同厚く御礼申し上げます。

あなたが最新の狩猟に出かけている時に、そんなことをどうして思いついたのか、小包にしろ、何にしろ、そんなもののために時間があったなんて、私には思いがけないことでした。

私は、あなたのお手紙を読んで、ものすごく笑ってしまいました。それにしても、狩猟の旅なんて、静かに休める旅には、到底なりえないで

(163) コーネリウス・ヴァンダービルト・ホィットニーのこと。

しょうね。あなたは一体いつになったら遅れを取り戻すのでしょうか？
 らくだ流に貯めて置いてからにするつもりなのですか？

何が起きているかを書くことと、何にも書かないことは同じようなものです。あるいは、非常にそれに近いものがあります。3通の手紙を細々と書いたのですが、晩餐会、何回かの昼食会、舞踏会、レセプション、カクテルパーティー、その他こういったすべてのものが、いわば“すぐに忘れてしまうような会話が交わされた夜”という印象でした。

この生活は、今でもとても現実離れしていて、乗馬と太陽の光が私に束の間の正気を与えてくれるとはいえ、私はまだ目が覚めていません。私達は全員、**食べ過ぎ・睡眠不足・にこにこ過多**です。家にもどり、私が一体誰なのかを見つけるのは良いことですよね。

昨日は、とても感激的でした。ポルテス・ギル大統領の就任式でした。もちろん、休日になりましたわ。何マイルにもわたり護衛兵が並んでいる（少なくとも、会場のスタジアムまでのかなりの距離は）道を車で通りました。車の外を見ると、労働者や男女の群れが、秩序を乱すことなく、騒ぐことなく、スタジアムに向かって走っていました。スタジアム中は（学童がダンスをした建物、ご存知よね）、寿司詰めでした。あざやかな色の服を着た群衆がいて、赤いパラソルや三角の小旗を持ち、オレンジを売っていたり、それから時折、いくつかの客席では、鳥の群れのように白い紙吹雪が舞っていました（男達が、宝くじの券をまき散らしていたのです）。会場の最上部の周りにはグルッと一定の間隔で、兵隊が配置されていました（ですから上を見上げると、直立不動の兵隊達は、青い空を背景に描かれた絵のようでした）。その上には、また等間隔に三角形のペナント型の旗が翻っていました。非常に鮮やかで、炎があちこちで燃えているように見えました。外交関係者は、大統領や前大統領・カリエ

ス、等々が座っているステージの前にある、高い台の真ん中に座りました。

面白かったのですよ。群衆はとても明るく見え、厳粛に行動していました。歓呼の声もほとんどなく、混乱もなく、アメリカ的なワイルドな熱狂もありませんでした。でも、そのために彼等を尊敬してしまいました。その祭典の厳粛さと真摯さに対し、大いなる尊敬の念を感じました。そこには、困難を耐え忍んだ人間の尊厳がありました。

ポルテス・ギル新大統領が、熱意に訴えるのではない、短く簡潔で真剣なスピーチをしました。思慮深く真剣で、非常に説得力に満ちたものでした（私は後で、英訳されたもので読んだのですが）。会場は静粛でした。ほとんど妨害もなく、拍手さえもありませんでした。（しかし、あの何千人というあらゆる階級の人々が、真剣に聞き入っていたのはとても印象的でした。）もちろん、彼はマイクを使って演説をしましたわ。

カリェスが立ち上がってその手を上げた時には、彼に対して、労をねぎらう熱狂的な歓声がそこかしこから挙がりました。

その後、楽隊がメキシコ国歌を演奏しましたが、歓声もなく、押し合いもありませんでした。国歌の旋律はとても感動的だと思いますが、全然おめでたい感激が湧いて来ませんでした。短調の曲で、この祭典のように厳粛で、いかめしいものでしたもの。

カリェスがポルテス・ギルを抱擁し、励ますように背中をたたくのが見えました。その時、彼の頬には涙が伝っていました。

その真剣さに実に感銘を受け、国民の誠意を感じとり、カリェスとポルテス・ギルはメキシコ国民の尊敬を受けるべきだと確信しました。私は、その場に立ち会ったことを誇りに思い、私の父を誇りに思います。

サンディが戻ってきました。舞踏会で彼に会いましたが、金モールが

いっぱいついた、ピシッとした染^しみ一つない制服を着て、明るく輝いていました。彼がサラービを着ることがあるなんて信じられませんでしたわ！ それから、私は飛行機にも乗り、あなたに関する話を自ら進んでたくさん話していた、ホィットニー何とかさんの隣りに座りました。彼はなかなかいい人で、面白い人でしたわ。

私は今の生活には、本当にうんざりしています。大学生活のほんの少しの単調さと取り換えられるなら、何とでも交換してしまいます。少なくとも、大学時代は、自分が何をしているのかとか、何をしたいのか、私には解っていました。このごろの私は、ペストリーを常食にさせられているようなものですが、黒パンも少しは食べたいのです。家に帰るとは気分転換になりますわ。

本当にありがとうございました。

アンより

1928年12月2日〔妹宛の手紙〕

メキシコシティのアメリカ合衆国大使館にて

すてきなコズへ

日曜日の午後よ、感謝祭の日曜日の午後、だから、あなたはきっと学校に戻るのよね。いろいろなことの中で、一番嫌な気持ちよね。私もあの夕方4時の汽車で戻って行ったことを、ありありと憶えているわ。寒くて、みじめで、1分ごとにだんだん家から遠く離れて行くの。

私は、毎朝ベックさんの家の人達と馬に乗るのよ（ボイドがここにいた2週間は、それをサボったのだけれど、ベック家の方達は、慈悲深く寛大で、私のチリ紙のような弁解——「疲れている」とか「忙しい」とかの見え透いた弁解——を聞いてくれたわ！）時々、私達は2時間位乗馬をするの。ロス・レメディオスの方に向かって、トゥモロコシ畑やサボテンの列を横

切り、バランカのところまで。でも、いつもは同じ道を行くの。散歩道を大農場の畑の端に沿って行き、あの羽のようなユーカリの木々（朝の光の中ではブルーなのよ）の下をゆっくりと馬を駆けさせるのよ。ユーカリの長い並木が、道に影を落としているわ。

私は、乗馬をしてる時は幸福よ。一日の残りの時間は、恐ろしいほど現実とは思えなくて、落ち着かないわ。昼食会か、レセプションか、晩餐会かのどれか、そうでなければ、何にもせずただここに座って、待っているだけの時間。実に耐え難いのよ。

「まだ5時半、夕食までは2時間。2時間経つと、何をすることも疲れすぎていて、自分の上着を脱ぐのさえもあまりに面倒臭くて、それに寒すぎるし……。」（いつも、すごく寒いよ）

私は、熱いお風呂に入るの。それには、大体20分かかるでしょ。それから、たぶんお昼寝。お昼寝は実にいい気持ちよ。私の重要な方針は、考えないこと、ただただ、一切考えないこと。その結果、私はまた、あの“陥没した島”のような落ち込んだ気分になっているの。

それも、私達の友達であるボイドのせいよ、もちろん。カレが、私達のところに来ていた時には、私はすごくカレに夢中になっていて、世の中の他の人達のことを完全に忘れていたのよ、文字どおりに。大学生活なんて一切なかったの。大学の友達も存在しなかったの。読書は、どうせ生活の中では大して必要ないわね。私が一緒にいて、親しく生き生き出来た人達は、どこかへ行っちゃったのよ。ひらめきと、薔薇色に彩られた小さなことにも心ときめくという世界が、海に飲み込まれ消えたの。過去を顧みるでもなく、前途を見やるでもなく、ただこの驚くべき、抵抗しがたい、最高に説得力のある人物が、今となっては去ってしまったので、すべて過去のことになってしまっているの。でも、埋め合わせるものは、何にもないのよ。

私は読むことも、書くことも、また、かつての私のように音楽や美術の鑑賞の世界に没頭することも出来ないの。私に興味を抱かせる人が誰もいないのよ（魅力的な人達に会って、楽しくお喋りはしたけれど）。ボイドは、私からあらゆる力を奪ったの。そして、私は抜け殻になってしまったの。だって、私はカレを思い出すことさえ出来ないのよ。私は、すっかり無感覚でボーッとしているの。またカレに会いたいとさえ、思わないのよ。カレがいなくても寂しくもないし、現実のことじゃなかったのよ。信じられないことだったのよ。ボイドがその辺にいない時には、そんな人、この世に存在しないのよ。自分が何をしたいのか、私は分からないの。本当に、この世の中で私がしたいことは、何にもないの。

「とにかく、この男性は一体誰なの？」私は本当にカレを恋することは出来ないわ。それは夢であり、間違いなのだから……。私とカレは全く正反対の人間なの。——カレはあなたが好きだけれど、それは実在のあなたではない。いずれにしても、あなたはカレが好きなのではないわ、カレがいなくてもちっとも寂しくないのだから。」と、ぼうっと考えるのは、何の役にも立たないし……。

ただこの決定的な空虚感、そして、とにかくするうちに、おばあちゃまはボイドのことを思い出して、感傷にふけて、私を見守っているの。カレにはエングルウッドで会うと思うけれど、でも、それが何になるというの？ あーあ、これは、『サタデー・イヴニング・ポスト』の読者が想像する半分も容易なことじゃないし、それほど面白くもないわ。

それに、大使館のアランとフレッドにカレが軽率に笑われるのは、とても傷つくのよ。カレのユーモアのセンスのなさ、悪ふざけ、融通の利かなさをね……。ああ、残酷だわ。だけど、私も一緒になって笑わなくてはいけないのよ。だから、わかるでしょ？ 乗馬をして、お風呂に入ってお昼寝をして……全然考えないことが一番いいのよ。

ボイドが、「飛行が与える静穏な気持ちと調和を、人は決して忘れない」と、言っていたわ。それから、夕陽を座って見つめているのは、とても耐えられないわ。カレはこう言ったのよ、「自分も夕陽の一部になりたい」と。この間、カレから手紙が来て、いろいろなことが書いてあったけれど、夜、イカレタ運転の車に乗ったことが書いてあり、その車に乗った後に、“航空の安全”について、自分で記事を書く覚悟が出来たと、書いてあったわ。あなたの“航空の安全”はどうなっているの？

1928年12月

ニューヨークへ向かう途中、ブルマン個室車両にて

1日目

親愛なるコンヘ

ちょうど『オーランドー』⁽¹⁶⁴⁾を読み終えたところ。1日の4分の3もかかっちゃったわ！ 午後4時半に読み終え、それから、マラスキノ酒^{*141}漬けのチェリーの入ったオレンジードを背の高いグラスで飲んだの。ということは、夕食まで約2時間よ。この1、2ヶ月間、本を1冊ちゃんと全部読み終えたことがなかったの。この本は、とても夢中になって読んだわ。エキサイティングではないけれど、引き込まれたのよ。物語に溶け込んでしまったわけ。だから、その世界から現実に戻ってから、まだその小さな破片が身体にくっついているのよ。しばらくの間、人はその薄いヴェールを被って過ごすの。昨夜見た夢の余韻を抱えて午前中の半分を過ごすことが、時々あるでしょう？ そんな感じよ。

もちろん、それは見事に書かれていて、他のどの作品よりも美しく、慎重に、そしてある意味では、整然としたスタイルで書かれているわ。比喩も直喩も、その描写は美しく、得心のゆくものだわ。主人公のオー

(164) ヴァージニア・ウルフの小説。〔1928年10月刊行。アンは話題の新刊を読んだ。この書簡中の引用部分の日本語訳は、杉山洋子氏訳『オーランドー』（国書刊行会刊、1992年）から引用した。〕

*141 旧ユーゴスラビアのダルマチア地方産のマラスカというサ

ランドー、彼であり彼女が、私を楽しませてくれるの。見事な出来映えだと思うの。テーマが首尾一貫していて、矛盾がなく、なるほどと思わせるし、論理が通っているわ（作家の勝利だと、私は思うの）。でも、あなた、つましさに欠けていたと思わなかった？ あまりに豊潤で、あまりに濃密で、そして他の作品が持っていた明快さに比べて、こってりしすぎていたと思わなかった？ ピンと来るものが半分もなく、あの水晶のように透明な人間関係の描写がなくて、どういうわけか、洞察力も感じられないの。あの『灯台へ』*142にあった、中心で燃えている核が読み取れないの。

たぶん、私が理解しなかったんだわ。最後のほうで、よく解らなかったところがあるのだけれど、ヴァージニア・ウルフの感受性を驚くほど理解出来たと思うわ。彼女は感受性が鋭く、溢れているわ。

「(彼は)彼女をメロンだ、パイナップルだ、オリーブの木だ、エメラルドだ、雪中の狐だ、と呼んだ。自分は彼女の声を聞いたのか、味わったのか、見たのか、あるいは聞いて味わって見たのか、それもわからぬ。」

というところ、あなた、本当にいいと思わない！

それから、「顔のこと、羽のこと」という、彼とサーシャの会話の描写。「だが、あれが眠りであったとして……その黒き翼で撫で和らげ、醜悪、最低のものにも光沢光彩を添えてくれるのであろうか？」で、始まる段落には、私は並外れた美しい世界を想像するわ。

そこには、実に多くの繊細なユーモアもあるのよ。「あんなに御立派な紳士に書物など無用だ。本など中風病みか死にかけの病人に任せときゃいい、と口を揃えて言った。」(ボイドの思想と一緒だわ！)

彼女は一貫して、時間を巧みに扱っているの。「時計の時間と心の時間の度外れた食い違い」、そして、人々が本当はどれほど年老いている

クランボを原料にした甘いリキュール。

*142 ヴァージニア・ウルフの1927年に発表された小説。

のかを。

ああ、オーランドーの描写が、私は最高に大好き。

「人々の空想を掻き立て目を釘づけにして離さぬ力があつたことを物語っている。……この力は、美と生れと、魔力としか言いようのない類稀な資質を一つにした不思議な力である。……『百万本の蠟燭』が、自らは一本も灯さずして彼の中で輝いていたのだ。」

ウルフの男性と女性の分析は、とてもいいし面白いわ。

素敵で、啓発的で、真実を描く透明な文章は、「思考の高き砦、石の如く不変と思えた気質も、他の精神に触れただけで、影の如く崩れ落ち、後にはむき出しの空に清々しい星々が煌く。」

1928年暮れ〔姉宛の手紙〕

エングルウッドの古い家からの最後の手紙

愛するお姉様

このお家の事があなたにとって、とてもショックだということが、私にはわかります。それにしても、愛おしくない？ またこのお家の中に入ることは、決してないと思うけれど、たった今、全部のお部屋を回って来たばかりよ。ずっと、あなたのことを考えていたわ。青い薔薇模様の仕切りのある子供部屋で過ごしたあなたと私。はしかに雇ってお客様の寝室に入れられて、ビーズで遊んでいるあなたと私。ボーイスカウトのパレード、あれは、コンが生まれる前の晩のことだったわ。

それから、あなたのお部屋。とても大切なあなたの本と写真、(ええと、私は何を言おうとしているのかしら？ それを見ると、まるであなたの声を聞いたかのように、私の気持ちを暖めてくれます。)

次は、お母様のお部屋。ソファの上の日曜学校、それに、ハンカチを出したいのに、なかなか開かない簞笥の引き出しを力一杯グイッと引

ばったこと。

ドゥワイトの部屋。彼が病気の時に、あなたが寝ないで看病していたことも……。

その後、私はお庭を足早に通り抜けたわ。あの小道を下ったあずま屋の所に燃え殻があり、燃えた葉っぱの匂いがしていました。(私達の得意の離れ技よ、憶えてますか?) それから、梨の木があった所、梅花うつぎの茂みと砂場。よくその赤い実でお店屋さんごっこをした、あの花水木。そういえば、オースティン⁽¹⁶⁵⁾がある日、私達をからかって赤い実を全部持って行っちゃったのよね。

それから、お庭のあの大きな2本の樹を振り返って見ました。コンに言ったのですが、私はいつもこの樹を“結婚している木”と呼んでいました。2本共とても力強く、一方がもう1本よりも少し背が低く、まるで助けを仰ぐように見上げているんです。私は守ってあげている方の、あの真っ直ぐな樹が大好きです(もちろん、男性です)。でも、この樹は両方共とても強く一本立ちしているのです。

榎の木も、階段から見ると見事です。それに、玄関のそばのライラックの茂みと、「みんな、揃っているわよ」という実に嬉しい満足感を与えて、ボタンと音をたてて閉まる大きな緑色の扉。

ああ、大好きな大好きなお姉様、私達はずっと一緒よね? こういった思い出のすべてと、また、これから新しく芽生えて来るたくさんのものがあるのだから、つながって行くのよね。なぜって、私達は二人の独立した、お互いに興味を抱いている人間同士ですものね。どんなことがあっても、一緒よね?!

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

(165) トーマス・W・ラモントの息子。後に医師となり、医学の教育者となる。

日付なし〔幼なじみのコーリス・ラモント宛の手紙〕

親愛なるコーリスへ⁽¹⁶⁶⁾

『哲学的な詩人』を送って下さったことへのお礼の手紙を、ニューヨークから書くつもりでした。あなたとマーガレット⁽¹⁶⁷⁾が、エリザベスと私にその本が理解出来ると思ってくれたことがとても嬉しく、得意な気持ちになりました! 私はメキシコに着いたら、一人きりになって(そのためには、浴室に入って鍵をかけなければならなくても)それを読みますわ。

コーリス、あなたに再びお目にかかれてとても良かったわ。あなたとは、長いお喋りをしたいと思っていたし、今もお話したいわ。

私はチャールズ・リンドバークと結婚します。それは、あなたにとって、とても信じられないことに思えるに違いありません。結婚についての私の考え方からすると、この結婚は私にとっても、とても不思議なことに思えたのですから。「安全な結婚」「共通点」「好み」「静かな生活」……今の私が明らかに逆らっているそういったものは、すべてその意味を失ったか、他の定義を持っているように思えます。おかしいわね。いずれにしても、人は何故結婚するのでしょうか? 私はこのような形の結婚を期待したり、望んだりしていませんでした。たぶん、そのお陰でこうなったのでしょう。自分が結婚したくないタイプの男性と婚約したり、自分が望まない生活をするに決めるのは、破滅的なことに違いありません。断固としてそれに背を向け、まさに『不思議の国のアリス』流で、反対の方向に歩き出したらそんな人生にぶつかって行ったんです。そして、そこに彼がいたのです。全く何てことでしょう!

偉大な西部の力持ちの野性派と、行動あるのみの生活! でも結局、私はどうしたらいいというのでしょうか? つまるところ、そこに彼がいて、私はやるしかないのです。さっさと早く片付けてしまうことが出来ればいいと、思っています。恐ろしく気紛れな、途方もない、馬鹿げた

(166) コーリス・ラモントのこと。

(167) コーリス・ラモントの妻。

世間の評判。そして、多くの人達が、「私がどんなに幸運で幸せな女性であるか」と、口々に言うのよ。

コーリス、もしあなたがお手紙を下さって、そこに私へのお定まりのお祝いの言葉を書いてあったら、私は絶対にあなたを許さないわよ。私に幸福を願ったりしないで下さい。私は、幸福になるために結婚するのではないのです。私の願いは、それを超えたところにあるのです。私が、勇気と強さとユーモアのセンスを忘れないように願って下さい。私にはそれがすべて必要なのです。

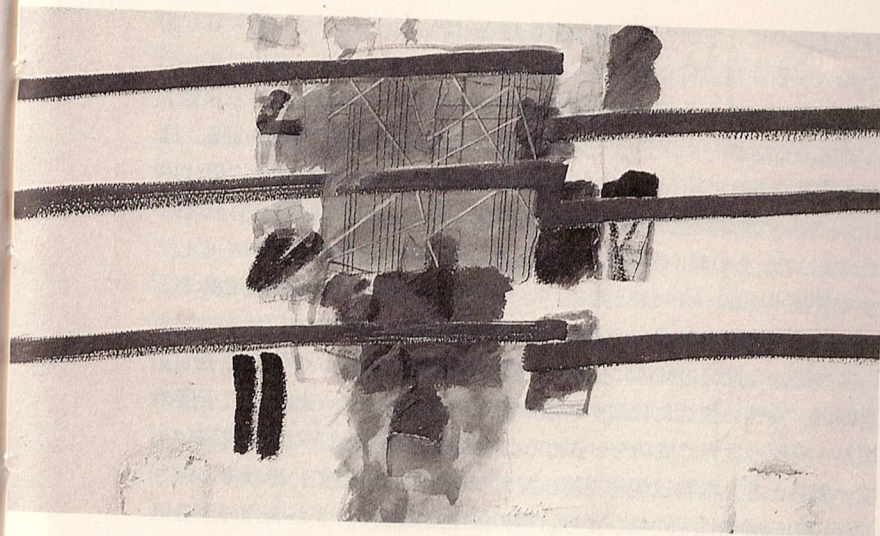
おかしいわね、私があなたにこんなお手紙を書いているなんて。でも、あなたには、紋切り型の“カレはまったく素晴らしい”調のお手紙を書きたくなかったのです。あなたのことはとてもよく解っているつもりです。コーリス、これは、誰にも見せないで下さいね。それから、誰にも言いつけないで下さいね。もし、これが新聞に出てしまったら大変なことになるでしょう。どんなことでも、記事になってしまうようなのでね。マーガレットには、言ってもかまわないわ。私は彼女を信頼しているし、彼女のことが好きですもの。

あなたにカレがつまらない人だという印象を与えたまま、このお手紙を終えたくはありません。カレはそれよりもずっと中味のある人です。でも人について語るといことは、ほとんど無駄なことです。コーリス、あなたがカレに会うまでは、私の意見を言わないことにするわ。カレに関する新聞記事、ちょっとした知り合いの意見、好意的な記事も、どれも全く間違っています。

カレには、洞察力とユーモアのセンスと類いまれな素敵な目があるのです！

それでは、今日はこのへんで……。

Anne



佐野 ぬい

速い線の様式

アクリル水彩・紙 31.0×55.0cm

母に代わって

アン・モロウ・リンドバーグの娘として、母の手紙と日記が2冊、日本の読者の方々に紹介されることを知り、喜びでいっぱいです。母は1931年に初めて日本を訪れ、その「国」と「人々」の両方に魅せられてしまいました。その時、母は私の父である、パイロットのチャールズ・オーガスタス・リンドバーグと共に、ロッキード・シリウス水陸両用機で、ニューヨークから東京への北太平洋航空路の調査飛行中でした。

私の母は今世紀の初めに生まれ、20世紀も終りに近づく今と比べれば、当時は、女性の生活には遥かに自由がなかったにもかかわらず、子供の頃から男性の世界で成功をおさめるべく運命づけられている女性特有の、強い個性と非凡な自己規律を持っていました。そして、母はその強さと深い美的感受性とを結びつけ、母の人生を通じて、また著作の至る処でその独特の想像力を育み、彼女の言葉を使って、世界中の人達の人生を豊かなものにしてきました。

まず、1冊目の『ユニコーンを私に』を私と同じくらいに、皆さんが楽しく読んで下さったら幸いです。私が初めて読んだ時には、母の家族に対する暖かい愛情、友達に対する深い友情、向学心、そして人生での満ち溢れる大きな喜びを持った、うら若き乙女としての母のことが、非常に良く理解できました。

母は、学問と正しい礼儀を是としていた厳格な家庭で育ったのですが、何かを書いて表現する場合の彼女は、実に率直で自由だったのです。それでも、家族は非常に仲が良く、ユーモアと善意に満ちていました。

メキシコで初めて父に出逢った時のことを、「この内気な青年は、公式のレセプションばかりが多すぎて、楽しみが無き過ぎる」と、母とおば達は判断したのだと、母が私に言っていたことを思い出しています！

姉妹がリンドバーグ大佐を台所に連れ込んで、ミルクとソーダ・クラッカーを出してあげて、まるで家族の一員であるかのように、一緒に笑ったりお喋りをしたところ、父はみんなとリラックスして話すようになり、

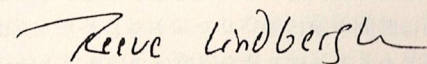
自分もメキシコでの日々を楽しめるようになったのです。あの有名な飛行の後で出会った人々の多くが、父のことを神聖な翼を持った神のように崇めたものでした。一時期でも、自分と同じ年頃の人達と一緒に過ごし、普通に笑ったり、冗談を言い合ったりして、父はとてもほっとしていたのではないかと思います。

母は、父が「私と同じように兄弟姉妹を持ち、一緒に成長しなかったことを、いつも気の毒に思っていた」と申しておりました。父には異母姉妹がおりましたが、彼女達はずっと年上で、父が幼い時から別所帯を持っていたので……。両親が結婚してから、6人も子供を産んだのは、恐らくこういうことが理由ではないかと、私は思っております。母自身が子供の頃から知っていた家庭生活の“暖かいエネルギー”を再現し、父と本物の家族を築きたかったのです。

その反面、父と結婚したことで、今度は母が新しい世界に入りました。パイロットという父の職業は、技術的な能力、体力的なチャレンジ、そして精神の自由を兼ね備えたものであり、母を刺激し喜ばせるものだったのです。空の上では、学問も、礼儀正しさも、大使館の生活そのものも、何の意味もありませんでした。父と共に空を飛ぶことで、それまで知らなかった自由と、当時はほんの僅かな女性にしか開かれていなかった、まったく新しい技術の分野、そして彼女の中に住む“詩人”と“哲学者”を魅了する陸と空の眺望を、母は知ったのです。それに何よりも、母は恋をしていたのです。いろいろな意味で、それは“天にも舞い上がるような経験”だったのです。

母が素晴らしい作家であることで、私はとても母に感謝しております。私も、そして世界中の方々も、その経験を母と分かち合うことが出来るのですから。

1996年12月



リーヴ・リンドバーグ

Reeve Lindbergh (絵本作家)

親愛なるアン

お元気でいらっしゃいますか。お嬢さんのリーヴからあなたが、高齢ではあるけれども、静かにとても幸せに暮らしていらっしゃると伺っております。

あなたの日記とお手紙をまとめた『ユニコーンを私に』の翻訳がようやく終わり、出版されることになりました。翻訳を開始してからもうすぐ2年にもなりますが、この間に、是非とも著者であるあなたにお目にかかって確かめたかったことがたくさんありました。リーヴにそう申し上げたところ、「私に聞いてくだされば、母の代りに知っている限り私がお手伝いするわ」とおっしゃってくださり、数え切れないほどの疑問を、質問を、一緒に考えたり、調べたりしてくださいました。「あなたのお陰で、また昔の母に会えて、本当に嬉しいのよ」と言ってくださった、彼女のご親切な助けがなければ、私は2冊の本の翻訳を途中で止めなければならなかったでしょう。

通訳養成所に通っていたときに、西山千とおっしゃる日本の通訳者の神様みたいな先生が、ご自分の言葉なのか、あるいは誰かの言葉の引用なのかは、はっきり記憶しておりませんが、こんなことを言われました。「理想的な通訳者は、話をする人よりもその話の内容を知っている人ですが、そんな人はいないわけですからいろいろな分野の知識を持っていなければなりません。」それから、こんなことも言われました。「通訳をするときは、話をする人の思想に乗ること。」こんな当たり前で、難しいこともありません。

これは翻訳をする時にも心がけるべきことだと思います。翻訳の場合には時間をかけて、リサーチをしたり、人の助けや知識を得ることもでき、なんとか切り抜けられることもあります。本人に聞ければ理想的ですが、それがかなわないときには、推理を駆使しなければなりません（とはいえ、私の想像力はとても貧血ぎみなのです）。

それにしても、1928年12月1日付けのチャールズへの手紙の中で「ら

くだ流に」というのはどういう意味だったのでしょうか？ リーヴにとってもいまだにパズルです！ それから、色や場所や地形の描写は、私の経験に基づいてしか訳せないもので、いまだに隔靴搔痒の感があります（中国の人達はこんな表現を使ったんです）。でも、低空飛行で飛んだことがあるので、自分の乗っている飛行機の黒い点のような影がどこまでも一緒についてくるのや、水面が水銀か鏡のような感じに見えたり、人や車や家がミニチュアのように見える感じなどはよくわかりました。

それから、何といっても、チャールズに対するあなたの憧れ、恋心……自分では駄目なのだとか、エリザベスの方がどうのこうのとウジウジしている様子には、「あーあ、またカレの話か」とも思いながら、実に共感が出て、ここでもあなたが大好きになりました。仕方がありません、何しろユニコーンの御出現なのですから！ 恋愛は実存主義的経験であって、他人には解らないものだという説を私は支持していますので、もしかするとどこかであなたのお気持ちを誤解してはいないかと心配もしています。チャールズを描写するときに使った“Impersonality”の解釈を、是非あなたから伺いたかったと思います。

あなたが、ある日には、一人になりたくて、また別の日には素敵な人々に会えて良かったと喜んだり、「今日は絶好調」かと思うと、次の日は「冴えなくて最低だ」と言ったり、みんな同じだと思っておかしくなりました。

たくさん詩の引用が出てきましたが、特に、長い詩からのほんの数行の引用は解釈が困難で、詩の全体がリサーチで見つかった場合はともかく、出典もわからないものは大変でした。それから、あなたの教養の深さや言葉の選び方、使い方、文章の格調が、日本の読者に伝わり、私と同じ感想をもって下さると嬉しいと思っています。また、年齢に関係なく、いろいろな人達の知的深求心に対する刺激になると思います。

それにしても、本書が出版されることになったのは、編集者が、『海からの贈物』（吉田健一訳）を読んであなたの熱烈なファンになり、私が、「アン・モロウ・リンドバークは、他にもたくさん本を書いている」と言ったことが引き金でした。

この本の出版にあたり、『海からの贈りもの』の翻訳をなさった作家

の落合恵子さんが、素敵な推薦の言葉を書いて下さり、とても感激いたしました。彼女の推薦にふさわしい出来映えならとてもうれしいと思います。

また、表紙や挿画は、女子美術大学の佐野ぬい先生が引き受けて下さいました。一度お目にかかりましたが、その作品と同様魅力的な方です。

それから、リサーチを手伝って下さった平野亮君という青年にも、大変お世話になってしまいました。その調べ方といったら見事という言葉がぴったりなんですよ。英語の言い回しのわからないところは、友人のアン高橋とサンドラ森にずいぶん助けてもらいました。

特に大きな貢献はしてくれませんでした。毎日一緒にいるので、翻訳で悩むと夫に話しかけ、彼は時々ものすごいひらめきを私に分けてくれました（本人は意識しておりません）。そういえば、彼は高価な（！）言葉をたくさん知っているのです。紙だらけのテーブルも、いい加減なハウスワークも一切文句を言わなかったことに感謝しています。おわかりになります、アン？

そして、最後になりましたが、誰よりもあなたに、あなたの青春の日々と、豊かな教養と、悩みと、ユニコーンを私達と分かち合って下さったあなたに、心から感謝を捧げます。私は、また遠い昔の大学での友達との会話や、試験のときに時間がなくてあせったりしたこと、自分に一生懸命言い訳をしたことなどを思い出して、しばしば楽しい思いをさせていただきました。「ああ、そう、これよ、この感じわかるわ」と共感したり、久しぶりにプラトンの『ファイドン』は何か書いてあったのか気になり、大学で30年前に使った哲学の本も読みました。あっちこっちに置き忘れてきた、私の忘れ物がいっぺんに返ってきたような気がしました。ありがとう！

主の平安と祝福がありますように。御身を大切にね。

ごきげんよう

中川 経子

1996年12月

アン・モロウ・リンドバーク 覚え書き

- 1906年 6月22日、ニュージャージー州エングルウッドで銀行家・政治家で外交官であったドゥワイト・ホイットニー・モロウとエリザベス・リーヴ・カッターの間に、次女として生まれる。アン・スペンサー・モロウと名付けられる。（長女のエリザベス・リーヴ・モロウは、1904年生まれ。）
- 1908年 弟のドゥワイト・ホイットニー・モロウ・ジュニアが生まれる。
- 1913年 法律事務所勤務の父が、J.P. モルガン社の役員になる。
- 1915年 妹のコンスタンス・カッター・モロウが生まれる。この頃から、エリザベスとアンは、近所に住むコーリス・ラモントと仲良く遊んでいた。
- 1919年 ニューヨーク市の五番街の近く、東66丁目のアパートメントに引っ越す。エングルウッドの家はそのまま残し、休暇の折り等に使っていた。
- 1924年 スミス大学に入学。
- 1927年 父がメキシコ大使に任ぜられ、メキシコシティの大使館に赴任する。この年のクリスマス休暇に、ニューヨーク・パリ間の無着陸飛行に成功し、各地を表敬訪問していたチャールズ・オーガスタス・リンドバークが、カリエス大統領の招きでメキシコシティを訪れ、二人が出逢う。
- 1928年 スミス大学で、同級生のフランセス・スミス失踪事件が起こる。ニューヨーク東17丁目のアパートメントに転居。また、エングルウッドの家は、道路拡張工事のため取り壊しになるので、パリセード通りから中心地に近い場所に新築された（ネクストデイ・ヒル）。エリザベス・モンタギュー賞とメーリー・オーガスタ・ジョーダン賞を受賞。
- 1929年 チャールズ・リンドバーク（1902年生まれ）と、5月27日に結婚。
- 1930年 父が上院議員に立候補する。長男チャールズが生まれる。
- 1931年 夫妻はロッキード社製シリウス機（水陸両用機）で、通常航路

- を利用せず、北太平洋航空路調査飛行を行い、カナダ、アラスカ経由で日本、中国を訪問。父、ドゥワイト・モロウの死去のため、予定を変更し急遽中国より帰国。
- 1932年 長男チャールズが誘拐され、死去する。次男のジョンが生まれる。^{*143}
- 1933年 夫妻は北大西洋から南大西洋を回る航空路調査のため、三万マイルを飛行。米国旗協会から名誉十字章が贈られる。
- 1934年 ナショナル・ジオグラフィック協会から、ハバート・ゴールド・メダルが夫妻に授与される。
- 1935年 1931年の調査飛行の時の体験を処女作『東方への空の旅』(North to the Orient) として出版。^{*144}イギリスに移住。
- 1937年 三男ランドが生まれる。夫妻でインドまで飛行する。
- 1938年 フランス・ブルターニュ沖の島に住む。1933年の航空路調査の体験を綴った『聞け！ 風が』(Listen! the Wind) を出版。
- 1939年 4月、アメリカへ帰国。
- 1940年 長女のアンが生まれる。『未来の波』(The Wave of Future) を出版。^{*145}
- 1942年 四男スコットが生まれる。
- 1943年 1937年のインドへの飛行の途中、アルプス上空で遭遇した出来事に基く小説『けわしい上昇』(The Steep Ascent) を出版。
- 1945年 コネティカット州スコッツ・コープの家に転居。次女のリーヴが生まれる。
- 1948年 夫のチャールズが来日。
- 1955年 『海からの贈りもの』(Gift from the Sea) を出版。^{*146}
- 1956年 詩集『ユニコーン』(The Unicorn) を出版。
- 1963年 それまでの家売り、同じ敷地にあるもう少し小さい家に移り

^{*143} リンドバーグ家の弟妹は当然、幼い頃に死亡した兄チャールズを知らないで、ジョンが長男として一家の生活が営まれた。

^{*144} 1942年に村上啓夫氏の訳他が出版されたが、現在絶版。

^{*145} 日本では、1941年に出版されたが、これも現在絶版。

住む。

- 1969年 月への初着陸前後のケープ・ケネディー宇宙基地における宇宙飛行士達を描いた『輝く地球』(Earth Shine) を出版。
- 1970年 4月26日、海洋学者である息子のジョンと共に夫妻が来日。大阪の万国博覧会場で懐かしい「シリウス機」との対面と、鯨保護のキャンペーンが目的だった。この頃、春・秋はコネティカットの家、夏はスイスの別荘、冬はハワイのマウイ島で過ごしていた。
- 1971年 『ユニコーンを私に』(Bring Me a Unicorn) を出版。
- 1973年 『輝く時、失意の時』(Hour of Gold, Hour of Lead) を出版。
- 1974年 8月26日、夫チャールズ・リンドバーグ死去。『閉ざされた部屋、開いた扉』(Locked Rooms and Open Doors) を出版。
- 1976年 『花といらくさ』(The Flower and the Nettle) を出版。
- 1977年 1927年の大西洋横断飛行成功の50周年を記念してチャールズ&アン・リンドバーグ財団が設立され、「リンドバーグ賞」が科学技術の発達と地球環境保護の共生に寄与した人に贈られている。
- 1980年 『内なる闘い、外なる闘い』(War Within and Without) を出版。
- 1993年 The Women in Aerospace Lifetime 受賞。長女のアン・スペンサー・リンドバーグ死去(彼女も作家であった)。
- 1997年 『ユニコーンを私に』『輝く時、失意の時』を日本で出版。

1997年現在、アン・モロウ・リンドバーグ夫人は、コネティカット州にある自宅で、家族に大切にされながら平穏な日々を送っている。息子を亡くしたり、他国での暮らしを余儀なくされた時期があったり、戦争へも賛成せざるを得ないという厳しい時代もあったが、波乱に富んだその人生も、家族の暖かい輪を大事にしてきた晩年は、幸せに満ちている。

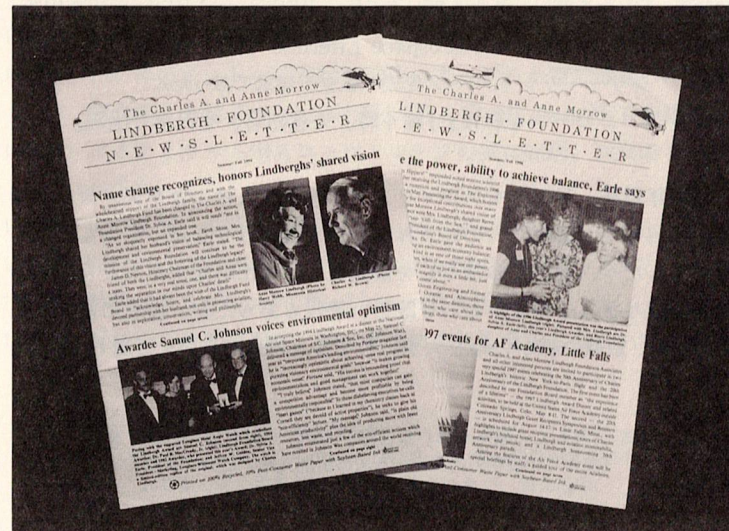
^{*146} 『海からの贈りもの』落合恵子氏訳、立風書房刊の単行本と『海からの贈物』吉田健一氏訳の新潮文庫で読む事が出来る。

姉エリザベスの経営していた保育学校“The Little School”は、彼女の死後“The Elizabeth Morrow School”となり、アンは理事の一人であり、全学年の学校として現在に至っている。

リンドバーグ家の長男・ジョンは、現在ワシントン州在住、鮭の養殖等の水産業のコンサルタントをしている。彼は1970年の大阪万博の際に、両親と共に来日した。次男・ランドは、モンタナ在住、牧場を営んでいる畜産家。環境問題に関心が深く、各種の活動に参加し、特に、川の環境保全運動に力を注いでいる。三男・スコットは、ブラジル在住の動物行動学の専門家で、現在はこうもりとジャガーを研究中。そして、今回、親身な御協力をいただいた次女・リーヴは、絵本作家として何冊かの著書があり、日本でも1992年に、『りんごの木を植えた男 ジョニー・アップルシード』が出版されている（アーバン・コミュニケーションズ刊）。

三好企画・編

リンドバーグ財団発行の新聞



謝辞

*本書のために、次の方々にもご協力いただきました。古い新聞記事や写真等を貸して下さいましたこと、心より御礼申し上げます。

石井 洋子
 酣燈社
 佐野 開作
 杉山 洋子
 同志社大学 国際センター国際課
 根室市博物館開設準備室
 フランス政府観光局
 松井 康輝
 メキシコ政府観光局
 レンドール & ティーナ・ナイト
 渡辺 郁江

(敬称略・五十音順)

装画作者紹介

佐野 めい

青森県弘前市に生まれる。女子美術大学卒業。新制作展、女流画家展を主な創作発表の場としているが、頻繁に開催される個展を通じて広く多くの愛好家の共感を集めている。ことに、豊かな空間表現と美しい色彩の融和を示す抽象画の作品は高く評価されていて、数多くの受賞、文化庁の作品買い上げなど輝かしい実績を残している。近年では東京ウィメンズプラザ壁画制作、読売新聞日曜版「女のしおり」の挿画を担当するなど、女流画家ならではの活躍が目立つ。現在、新制作協会会員、女流画家協会会員、女子美術大学教授。

ユニコーンを私に

1922～1928 アン・モロウ・リンドバーグの日記と手紙

1997年2月20日 発行

著者 アン・モロウ・リンドバーグ©

翻訳 ながわ みちこ
中川 経子

装画 佐野 めい

発行者 ゆたか
三好 寛佳

発行 美術の図書 三好企画
〒270 松戸市新松戸7-63 5C-622
電話 047(347)3211

発売 (株) 求龍堂
〒102 東京都千代田区紀尾井町3-23 文藝春秋新館7階
電話 03(3239)3381

印刷 猪瀬印刷(株)

ISBN4-7630-9702-4 C0098

●乱丁・落丁本は、おとりかえ致します。

●本書の一部及び全部を無断で複写することは、著作権法で禁止されています。

Printed in Japan, 1997

